

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 5 日現在

機関番号：12102

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2011～2013

課題番号：23650371

研究課題名(和文) 体育学分野で求められるグローバル人材と育成プログラム

研究課題名(英文) Global human resource development programs in PE and sport science major

研究代表者

三木 ひろみ(MIKI, Hiromi)

筑波大学・体育系・准教授

研究者番号：60292538

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円、(間接経費) 840,000円

研究成果の概要(和文)：体育学分野のグローバル人材育成プログラムを開発・実施し、課題を検討した。夏季の集中プログラムとして言語や文化の異なる海外の体育学専攻生と多国籍グループで日本の体育やスポーツ科学、国際的な共同研究の仕方について学ぶTsukuba Summer Institute for PE & Sport、学内の留学生に英語でスポーツ指導をするブレ留学プログラム、競技のトレーニングを含めた海外での短期研修プログラムを実施した。日本人学生には、異文化に対する関心や様々な人々とかかわる力はあるが、他のアジアの学生に比べ英語力、説明力、理解力が不足していた。経験に留まらずグローバル力を習得する手立てが必要である。

研究成果の概要(英文)：Global human resource development programs for PE major students were developed and conducted. For example, in Tsukuba Summer Institute for PE and sport Japanese students worked in a group with international students from more than 10 countries introducing and practicing Japanese Budo and PE, participating an laboratory experiment, and planning a research project. In a preprogram, Japanese students taught exchange students tennis on campus and practiced group discussions in English. The Japanese students actively communicate with international students in informal activities, however their levels of English efficiency, logical explanation, and understanding were lower than other Asian students. Giving a chance to study abroad and/or working with people from different culture were not enough for developing global human resource. Programs for having real understanding and explaining what themselves really want to say are necessary.

研究分野：身体教育

科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学 ・ 身体教育学

キーワード：グローバル人材 人材育成プログラム 体育学専攻生 国際協働教育

1. 研究開始当初の背景

(1) グローバル人材育成の必要性

技術・社会の進歩に従い、グローバル化が進んでいる。多様な文化・価値観を持った人々の交流が益々盛んになり、世界各地で多様な人材入り乱れて活動している。経済的には、日本の人口や市場が今まで以上に拡大することが見込めない状況にあり、海外で活動する人材、海外の市場を開拓する人材、国内でも海外でも異なる文化・価値観を持つ人々と協働できる人材が求められている。世界や多様な文化はより近くなり、多国籍化しているにもかかわらず、近年、海外に留学する日本人学生の数は減少しており、ユネスコ文化統計年鑑によると、2004年の82,945人から、2008年には66,833人に減少している。また、第4回新入社員のグローバル意識調査によると、「今後海外で働きたい」と思わない新入社員は、2004年度の28.7%から2010年度は49%に増加するなど、「内向き志向」が指摘されている。

(2) グローバル人材像と求められる能力

こうした状況を受けて、産学人材育成パートナーシップグローバル人材育成委員会は、グローバル人材を社会全体で育成するための産業界・大学界の役割と取組みについてまとめ、大学、企業、政府に対しての提言を報告書にまとめている(経済産業省, 2010)。また、文部科学省の産学連携によるグローバル人材育成推進会議は、大学の学部教育に焦点を当てた産学官の連携によるグローバル人材育成の方策を取りまとめている(文部科学省, 2011)。

産学人材育成パートナーシップグローバル人材育成委員会(2010)は、グローバル人材を「グローバル化が進んでいる世界の中で、多様な人々と共に仕事をし、活躍できる人材」と定義し、グローバル人材に求められる能力として、活動の場が国内・海外に関わらず基盤となる能力として「社会人基礎力」の必要性を指摘した上で、外国語特に英語でのコミュニケーション能力、異文化理解・活用力を挙げている。異文化理解・活用力については、「異文化の差が存在するということ認識して行動すること」「異文化の差を良い・悪いと判断せず、興味理解を示し柔軟に対応できること」「異文化の差をもった多様な人々の中で比較した場合、自分を含めたそれぞれの強みを認識し、それらを引き出して活用し、相乗効果を生み出して、新しい価値を生み出すこと」と説明している。

産学連携によるグローバル人材育成推進会議は、グローバル人材を「世界的な競争と共生が進む現代社会において、日本人としてのアイデンティティを持ちながら、広い視野に立って培われる教養と専門性、異なる言語、文化、価値を乗り越えて関係を構築するためのコミュニケーション能力と協調性、新しい価値を創造する能力、次世代までも視野に入

れた社会貢献の意識などを持った人間」と捉え、大学の役割として以下を挙げている。「国際的な通用性を確保し、魅力ある教育を提供する」、「外国語による授業の推進や海外の大学との連携教育プログラムの研究・開発等、大学自体のグローバル化」、「日本人学生の海外留学を後押しする」、「優れた外国人留学生を獲得する」、「他国の大学づくりを支援する」ことである。

(3) グローバル人材育成と専門教育

大学は、社会が求める人材を輩出するだけでなく、高等教育機関として各専門領域に関するより高度な専門的知識と技術を習得させ、専門分野の学士・修士の質保証を図る必要がある。グローバル人材育成のためにも、どの分野にも共通する基礎力を身につけるとともに、専門分野の知識の体系的な理解や専門的知識や技術を活用し創造的に活動すること、専門教育を通じてあるいは専門教育と結びついたグローバル人材の育成が必要である。

本研究者は、基盤研究(B)「体育学部生のキャリアプランニング教育-プログラムと教材の開発(2007~2009)」において、体育学専攻の学部生を対象としたキャリア教育の実践を行い、その効果と課題について検討した。その結果、体育学部生は、自分の資質を把握することや人に伝えることの重要性については理解できたが、社会に貢献するという意識をもって仕事を考えることや、やったことがない仕事に自分の資質を活用する方法を考えるということが難しく、自分の経験や自分のやりたいこと、興味関心を、広く多様な場や人々、経験していない未来の時間に広げていくことができなかった。異なる文化や価値を理解し多様な人々と協働するグローバル人材を育成するためには、さらに知識・理解・思考判断の段階を越えて、行動を起こし、実際に協働する経験が必要である。

2. 研究の目的

産学人材育成パートナーシップグローバル人材育成委員会(経済産業省, 2010)や産学連携によるグローバル人材育成推進会議(文部科学省, 2011)等に示されたグローバル人材像を基に、体育学分野のグローバル人材に求められる能力の育成を目指し、(1)体育学・スポーツ科学の専門教育課程の中で能力の習得と人材育成を進めるためのプログラムを研究期間中に実施し、(2)効果の検証と課題の検討を行うことを目的とした。

3. 研究の方法

(1) 概要

平成23年度~25年度の研究期間中、筑波大学体育系と国際交流協定を締結しているクイーンズランド大学、ベドフォードシャー大学、オハイオ州立大学と協働で、夏季の集中プログラムとして、体育学を専攻する大学

生・大学院生を対象とした英語による協働教育プログラム Tsukuba Summer Institute for Physical Education and Sport を実施した。

(2) 実施期間と対象者

上記の3つの大学から、留学生を数多く受け入れ複数の国の大学の教育に携わっている教員が来日し、協働教育プログラムの開発と実施に関わり、各大学の学部生・大学院生とともに本プログラムに参加した。その他の国際交流協定校から学生とともに参加した大学教員は、協働プログラムの中で行われるグループワークの各グループのメンターとして、プログラムに関わった。

平成23年度は、7月16日～7月23日の8日間実施し、オハイオ州立大学1名、ペドフォードシャー大学2名、パーミンガム大学1名、リーズメトロポリタン大学1名、クイーンズランド大学1名、国立台湾師範大学1名、マナブラチナ国際大学1名、サンパウロ大学1名の計9名の大学教員が参加し、これらの大学と、仁荷大学、仁川大学、高麗大学、ソウル大学(韓国)、フランシュコンテ大学(フランス)から39名の学部生・大学院生、日本人の体育学専攻の学部生・大学院生37名の計76名の学生が参加した。平成24年度は、7月27日～8月4日の9日間実施し、クイーンズランド大学、ニューイングランド大学(オーストラリア)、ゲント大学(ベルギー)、アペリストウィス大学、ペドフォードシャー大学、エジンバラ大学(イギリス)、サンパウロ大学、マナブラチナ国際大学、仁荷大学、仁川大学、高麗大学、ソウル大学、国立台湾師範大学、オハイオ州立大学から45名の学部生・大学院生、日本人の体育学専攻の学部生・大学院生27名の計72名の学生が参加した。平成25年度は、7月12日～7月19日の8日間実施し、トロント大学(カナダ)、カリフォルニア大学アーバイン校、ケント州立大学、オハイオ州立大学、シラキュース大学(アメリカ)、アペリストウィス大学、ペドフォードシャー大学、エジンバラ大学(イギリス)、クイーンズランド大学(オーストラリア)、オタゴ大学(ニュージーランド)、センメルヴァイス大学(ハンガリー)、ナンヤン工科大学(シンガポール)、チュラロンコーン大学(タイ)、サンパウロ大学、マナブラチナ国際大学、仁川大学、高麗大学、ソウル大学、国立台湾師範大学から87名の学部生・大学院生、日本人の体育学専攻の学部生・大学院生30名の計117名の学生が参加した。

プログラム終了後、教員と学生に対して質問紙調査及びインタビューを行い、プログラムと学習成果を評価し、プログラムの改善を行った。

(3) グローバル人材育成のための協働教育プログラム

平成23年度と平成24年度は、Graduate Research Seminar と Sport Physical Activity and Culture in Japan の2つのプ

ログラムを実施し、参加者は2つのプログラムのいずれかを選択した。平成25年度は、これらにLaboratory Workshopを加え、3つのプログラムの中から選択させた。選択プログラムに加えて、全参加者が一緒に学習・活動する文化・交流プログラムを実施した。いずれのプログラムも、筑波大学体育系の日本人教員と海外の交流協定校の教員が協働で指導を行った。

いずれのプログラムでも、できるだけ国や文化の異なる学生を5-6人のグループにして、多国籍グループを構成し、グループワークを中心とした。プログラム中のディカッション、課題への取組み、課題発表は全てグループ単位で行い、最終日にグループ発表を行った。

Graduate Research Seminar、Sport Physical Activity and Culture in Japan、Laboratory Workshop、文化・交流プログラムの概要は、以下の通りである。

Graduate Research Seminar

Day 1 Orientation

Day 2 Session 1 Identifying a 'hot topic'/ Active reading workshop/ The annotated bibliography, memoing and blogging workshop

研究のテーマとして取り組む価値のあるホットトピックについて考える。ただ興味があるからやってみたいからという理由ではなく、取り組むべきテーマかどうかを考える必要があるということを確認する。講義の後、多国籍グループ内で取り組むべきホットトピックについて議論する。このセッション内で決定するのではなく、連日のプログラム内や課外でのグループの話し合いを通じて絞り込んでいく。テーマに限らず、研究方法等についても、絞り込みや修正・変更を繰り返して、各グループの研究計画発表に間に合うように決定する。また、ホットトピックを決定する前段階での効率的な先行研究の読み方(active reading)について説明する。

Day 3 Session 2 Literature review/ Research questions/ Theory and theorists/ Research questions relationship to literature review

研究手法やテーマの異なる3編の論文を用いて、ホットトピックに関連する先行研究の読み方と取捨選択・整理の仕方について学ぶ。そして、先行研究の検討を通じて中核となる考え方や理論を見つけた後、各グループで、自分たちが選んだ取り組むべきテーマに関するResearch Questionを設定する。

Day 4 Session 3 Research Design/ Matching research questions to design and methods (workshop)/ Data analysis - quantitative and qualitative/ Revising the task

質的研究と量的研究について講義を受けた後、研究デザインのAlignment(先行研

究 理論 研究パラダイム Research Questions 研究方法 データ分析 結果 先行研究 ...)について学ぶ。Research question と研究方法が合致していない場合は、Research question あるいは研究方法を修正する。これのワークショップ以降、各グループは繰り返し Alignment ができているかどうか講師陣から尋ねられる。

Day 5 Session 4 Presenting your work/ Writing for publication/ Preparing a conference proposal/ Oral presentation (workshop)

学会発表・国際会議での口頭発表、パワーポイントの作成の仕方、論文を投稿する研究誌の選択についての講義と演習。グループ発表の準備をする。

Day 6 Session 5 Relationship and collaborations/ Working with your advisers & peers/ Co-writing/ Casting the next wider-intra & international collaborations

指導教員や同僚との関係、国内外の研究者との共同研究の進め方、研究倫理についての講義とグループディスカッションを行う。上記のプログラム以外の時間には、各グループでの自主的な活動が行われ、前日に出された課題をまとめてグループ発表するための準備や、最終日のグループ発表のためのポスターの作成や口頭発表の準備を進める。

Sport Physical Activity and Culture in Japan

第1日目のオリエンテーションに続き、2日目以降以下の内容のプログラムを実施した。国籍の異なる5-6人のメンバーで構成された多国籍グループを活動単位として実施し、毎回の活動には必ずグループディスカッションが含まれている。

剣道の理論と実習、柔道の理論と実習、ボールゲームの理論と実習(戦術学習 Teaching Games for Understanding の理論についての講義と、日本の小学校で球技の教材として実施されているフラッグフットボールの実習と戦術学習)、体力テストと評価(全国の小中高等学校で実施されている新体力テストを実施し、自分の記録の評価とプロフィールを作成し、分析する)、小学校の学校体育見学、中学校の運動部活動見学、競技者とコーチのためのメンタルトレーニング(メンタルトレーニングの理論と実践についての講義と演習・実習)、競技者とコーチのためのメンタルトレーニング(競技者の心理的特性の比較文化とメンタルトレーニングについての講義と演習・実習)、グループ発表の準備と最終日のグループ発表(発表と質疑応答を含めて各グループ30分程度)。

Laboratory Workshop

第1日目のオリエンテーションに続き、H25年度は、2日目以降以下の内容のプログラムを実施した。国籍の異なる5-6人のメン

バーで構成された多国籍グループを活動単位として実施し、毎回の活動には必ずグループディスカッションが含まれている。

Day 2 運動生化学講義・演習 "Mimicking the effect of exercise on Alzheimer's disease: Gene delivery in the muscle." / Demonstration of the gene delivery in the muscle with fake animals.

Day 3 運動生化学講義・実験(Hot topics in Biochemistry/ Labo tour/ Experiment and data analysis: Exercise and stress) 事前に配布した関連する論文を読んでから参加させる。運動生化学における課題についての講義に続き、運動強度とストレスの関係を示す実験に被験者として参加する。実験データの分析結果を基にグループで考察し、発表する。

Day 4 運動生化学講義・実験見学(Lecture on animal experiments/ Animal experiment and discussion on date) 事前に配布した関連する論文を読んでから参加させる。運動生化学における動物実験についての講義と実験見学を行い、実験で収集したデータ分析の結果についてグループで考察し、発表する。

Day 5 スポーツ医学・バイオメカニクス講義・演習(Using Quantitative Motion Analysis for Investigation of Injury Mechanisms) 事前に配布した関連する論文を読んでから参加させる。バイオメカニクスの手法を用いたりハビリの評価に関する講義と演習・実習を行い、実験実習で収集したデータ分析の結果についてグループで考察し、発表する。

課外にグループ発表の準備をし、最終日にグループ発表を行う。各グループのポスターと口頭発表は、国内外の大学の教員が評価し、評価結果に基づいて、研究プロジェクト賞とプレゼンテーション賞が授与された。

文化・交流プログラム

異文化理解を促すためのプログラムとして文化・交流プログラムを実施した。

1日目のオリエンテーションでは、全てのプログラム参加者が集まり、異なるプログラムを通じて日本の文化・体育・スポーツ・スポーツ科学について学ぶこと、学習活動を通じて様々な国からの参加者と交流し、それぞれの文化や体育・スポーツの現状について学びあうことを説明した。また、参加者は出身国ごとにグループにまとめ、各国の紹介を行った。この時に、各国グループに対して、ターゲット国を指定し、各国グループに、指定された国について、本プログラムの活動や指定された国からの参加者との交流を通じてその国の文化や人について理解し、最終日に報告することを指示した。各国グループのメンバーは、本プログラム期間中は異なる3つのプログラムに参加しているが、それぞれのプログラムでの交流を通じて発見・理解したことをもちよって、最終日に、ターゲット国の人と文化について分かったことを各国

グループごとに発表した。

また、日本文化を紹介する活動として、全プログラム参加者が協力して手打ちうどんを作る活動、筑波山神社参拝、温泉体験、和菓子とお茶の会を行った。こうした日本文化を紹介・体験する活動においては、教員が説明や指導を行うのではなく、日本人学生参加者が海外からの参加者を誘導・引率し、説明や補助を行った。

(4) 運営方法について

筑波大学体育系と交流協定を締結しているクイーンズランド大学(オーストラリア)、ベドフォードシャー大学(イギリス)、オハイオ州立大学(アメリカ)とが協働でプログラムについて話し合い、各大学の教師が講師として関与して、本プログラムを実施した。

また、その他の協定校から数多くの学生を引率して参加している教員も、講師や、各グループのメンター、評価委員としてプログラムに関わった。

4. 研究成果

(1) 参加国と参加者数

平成 23 年度から平成 25 年度に実施した Tsukuba Summer Institute for Physical Education and Sport に参加した学生の出身国と参加者数の推移は、表 1 に示す通りである。

表 1 参加国と参加者数の推移

国	23 年度	24 年度	25 年度
台湾	15	8	15
韓国	5	10	14
インド	4	3	6
ASEAN	0	1	4
中国	1	1	2
オーストラリア	2	6	5
アメリカ	2	3	20
カナダ	0	0	5
ブラジル	4	5	4
イギリス	4	7	11
EU	2	1	1
日本	37	27	30
合計	76	72	117

(2) 参加者の満足度とプログラムの効果

平成 25 年度に Graduate Research Seminar(GRS)に参加した海外の学生(30 名)、Sport Physical Activity and Culture in Japan(SPAC)に参加した海外の学生(33 名)に対して行ったアンケート調査の結果、プログラムに対する事前の期待は、7 段階評定で、前者は 2.9、後者は 4.1 であった。プログラム終了後の成果の評価は、いずれも 5.9 となり、事前の期待以上の成果があがったと捉えられていた。日本についての知識・理解度は事前に 3.7、3.0 だった評価が 5.3、5.6 に、日本の体育・スポーツ科学についての知識・理解については事前の 2.8、2.2 から事後には 4.1、5.5 に、日本以外の国についての知

識・理解については、事前の 2.8、2.3 から、プログラム後には 4.8、5.3 に向上した。日本の文化・体育・スポーツ科学に関する知識・理解、その他の国に関する知識・理解は本プログラムで向上し、特に Sport Physical Activity and Culture in Japan(SPAC)プログラム参加者にこの効果がより見られた。Graduate Research Seminar の学習内容は研究方法・研究計画であり、体育・スポーツ文化に関するものではなかったが、多国籍グループワークを中心に実際されたこのプログラムの学習成果についての評価は、学習内容が体育・スポーツ文化であった SPAC よりも高かったことから、文化に関する学習でなくても、日本や他国の学生とのグループワークを通じて、日本や他国の文化に対する知識や理解を深めることができ、期待以上の学習成果をあげることができていることが分かった。

日本人参加者の学習成果と課題に関するレポートの質的分析の結果、平成 23 年度～25 年度にプログラムに参加した日本人参加者全員が挙げていた課題は英語力の不足であった。

平成 25 年度の日本人参加者の中には短期留学経験者も含まれていたが、研究計画を立案するグループワークでは思ったほど積極的に関与することができなかつたと自己評価していた。実際にプログラム期間中の行動を観察した結果、留学経験者や海外での語学研修経験者など、ある程度の英語力がある学生であっても、英語力が不十分な学生をサポートして通訳したり説明を補足したりすることはできていたが、英語を母語とする学生を含む多国籍グループワークの中では目立った関与は見られなかった。本プログラムの最後に行われた国別グループ発表で、日本グループをリードしていたのは、短期留学経験のある大学院生ではなく、普段から留学生との交流活動を積極的に行っている学部生であった。

GRS に参加した英語力が十分でない学生は、グループ発表では各グループのリーダーである英語圏の学生に読み上げる文章を割り当てられ、それを読むだけの発表になっていた。しかし、プログラム終了後の振り返りの中では、英語力を向上させる必要があると述べる一方で、英語力が不十分であってもコミュニケーションや交流はできたとして自己評価していた。

プログラム終了後、日本人参加学生に、各グループの研究計画の目的、Research Question、方法の Alignment を評価するという課題を出した。その結果、日本人参加者は、各グループの発表資料を基に研究計画について記述することはできたものの、Alignment の問題を指摘したり修正したりすることはできなかった。

以上の結果から、日本人学生のグローバル人材育成プログラムとして本プログラムを改善するためには、ある程度の英語力を習得

させる必要があるだけでなく、学習内容や他者の意見を確認するスキルと発言内容を十分理解する理解力、グループディスカッションに積極的に関わり発表をまとめる姿勢が必要であり、単に交流するためのコミュニケーションではなく、学習内容や互いの考えを十分に理解し、課題解決のための話し合いができる英語力、論理力、コミュニケーション能力の育成が必要であることが示唆された。

(3) プログラムの運営方法

本プログラムは、筑波大学を含めた4カ国4つの大学が協働で運営実施を行ってきた。留学生支援制度により短期留学(3ヶ月以上)よりも短い期間での教育プログラムに参加する留学生も支援が得られるようになり、参加国、参加大学の数は年々増えつつある。4大学のみが講師や運営の負担を追う方式から、より持続可能な運営方法に移行していくために必要な改善と課題に関して、以下のよう示唆が得られた。

まずは、教育の質保証とこのようなプログラムに参加することのメリットを保証するとともに、安定した支援を継続的に得るために、グローバル人材育成のためのプログラムを授業科目として単位化する必要があった。授業科目として単位化することによって、本プログラムに参加可能な大学は、交流協定校のみとなり、筑波大学体育系との交流協定を希望する大学が増える結果となった。一方で、それまで参加可能だった国内の他大学の学生の参加が難しくなった。単位化によって大学から安定した支援を受けられる体制は整いつつあるが、今後は、国内・海外の複数の大学と連携して、いずれの大学においても単位取得可能なプログラムとしてカリキュラムの構築と運営をおこなっていく必要があることが示唆された。

日本人学生のために日本国内で国際的学習経験を身につけさせるためには、海外の大学からの教員や大学生の参加が必要である。現状は、大学の支援による研究者の招聘や、留学生支援制度の支援を受けた留学生の受け入れによってこの条件を満たしている。前述の国内外の大学の連携・コンソーシアムを形成し、多数の大学がプログラムの質保証と維持に関与することによってこの問題を解決することが可能であるが、そのためには時間と様々な資源が必要になる。それまで過程で、持続的な発展のために活用できると考えられるのが、欧米の大学で夏季や冬季の休暇期間中に実施される Study Abroad Program の制度である。これは夏季・冬季休暇中に学生が異文化体験を通してグローバル人材として必要な知識と能力を身につけるために海外の大学に設けられているグローバル人材育成プログラムであり、単位が取得できる科目である。各大学は、Study Abroad Program として学習活動を実施できる拠点を海外に何力所か持っており、これらの拠点

は多くの場合、交流協定を締結している協定校であり、相互に学生を受け入れ・派遣している。Study Abroad Program は単位取得可能な科目であるため、学生がグループで参加する場合には、当該大学の教員が引率して指導する。Study Abroad Program の拠点となることは、degree program として規準を満たしていると評価されたことになり、国際的な教育の質を保証できる。したがって、国際的なコンソーシアムを形成してグローバル人材育成プログラムを実施する過程で、各国の Study Abroad Program 拠点として承認されることが一つの過程として重要であることが示唆された。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計3件)

三木ひろみ 平成23年度にSS評価された「教育/社会貢献・学内運営」について; 筑波英検補習から Tsukuba Summer Institute まで、筑波大学体育系紀要、査読無、37巻、2014、17-20、

<http://hdl.handle.net/2241/121265>

桐生習作、小林優希、中野勝司、藤田湧平、松元剛、三木ひろみ Tsukuba Summer Institute for Physical Education and Sport 2013 柔道実習報告、大学体育研究、査読無、36巻、2014、63-71

桐生習作、小倉武蔵、村瀬陽介、武田丈太郎、松元剛、三木ひろみ Tsukuba Summer Institute for Physical Education and Sport 2012 柔道実習報告、大学体育研究、査読無、35巻、2013、75-86、
<http://hdl.handle.net/2241/118921>

[学会発表](計3件)

ギド・ガイスラー、三木ひろみ ASPASP 2014 サポートワークショップ、日本スポーツ心理学会第40回大会、2013年11月3日、日本体育大学世田谷キャンパス(東京都)

三木ひろみ 体育学専攻生のためのグローバル人材育成プログラムの検討-Tsukuba Summer Institute for Physical Education and Sport の実践を通じて、日本体育学会第63回大会、2012年8月24日、東海大学湘南キャンパス(神奈川県)

三木ひろみ 私たちは「国際化」から何を得ようとするのか、日本スポーツ心理学会第38回大会、2011年10月20日、日本大学文理学部(東京都)

[その他]

ホームページ等

<http://www.siiit.jp>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

三木 ひろみ (MIKI, Hiromi)

筑波大学・体育系・准教授

研究者番号：60292538